

あるむぜお66

府中市郷土の森博物館だより

a l museo NO.66

2003年12月20日



凍るような寒さが街を包み込んでいます。誰もがこの冬の先には暖かい春がやって来る…そんな期待を抱きながら、そして時に想像を膨らませながら待ち焦がれているのだと思います。一番に春の訪れを予感させるイメージとして、代表的なものをひとつあげるとするのなら、「梅にウグイス」はいかがでしょう。

春さぬと人はいへども鶯の

なかなかざりはあらじとぞ思ふ

壬生忠考「古今和歌集」巻1-11

ウグイスも鳴かずに春が来たとは思えない、というストレートな表現です。この他にも「万葉集」(奈良時代)や「出雲風土記」(733年)の頃からすでに春を告げる使者として詠まれていました。そもそもウグイスは、「万葉集」の時代に朝鮮から朝廷に献上されたといわれますが、これは実のところコウライウグイス(コウライウグイス科)で、ウグイス(ヒタキ科)とは形態の異なる別種であったという疑問もあります。因みに鶯^{ウグイス}は日本ではウグイス、中国ではコウライウグイスを指すといいます。

日本で小鳥の類が飼育されていた記録が残っているのは、鎌倉時代以降になります。ウグイスもおそらくこの頃なのでしょう。江戸時代にはウグイスの飼い方を詳しくまとめた書物もあり、相当流行していたことがわかります。美しく鳴かせるにはどうしたら良いのか、育てるにはどんな雛^{ひな}が良いのかなど、細部にわたって説明がなされているそうです。鳴き合わせと称し、お互いのウグイス自慢を競う会なども開かれていたといいます。もっとも現在では1950年以降、野鳥の飼育は禁止となっており、許可なくして飼うことは不可能とされています。いずれにしても昔から愛され続けてきた鳴き声の美しい小鳥は、春を告げることで尚のこと印象深いのだと思われれます。

一方、人は百花に先がけて開花する梅にも同様の思いがあるようです。こちらも中国原産の樹木で、奈良時代には舶来植物として貴族の関心を集めました。万葉集には約160種の草花^{くさな}が詠われていますが、梅は二番目に多く登場するほどです。人々はこぞって美しい花を咲かせるべく競い合い、現在も盆栽の代表格となっています。まさにウグイス同様にもてはやされ、春を告げる重要なアイテムなのです。ですからこの二者がひとつに合わされば、春到来を実感するにはこれ以上ない要素と思うくらいに風情を醸し出すのです。実際、古くから梅の木に止まるウグイスが描かれた絵

は数多く存在します。ある種、春といえば条件反射的に梅にウグイスを連想する人も多いはずです。共に一世を風靡した者同士、今も変わらず親しまれている梅とウグイスは、春のイントロには欠かせない最適任者といったところでしょう。蛇足^{だそく}ですが、実際はこのあたりの梅の樹上で見かける鳥は、どうもウグイスというよりはメジロなんですけどね…



梅にメジロ

そこで「梅まつり」です。春を告げる当博物館の一押しアイテムは「梅まつり」期間中に開催される野点^{のちて}の風景。梅にウグイス(メジロ?)に加えてさらに春が近いことを教えてくれるのです。市の花ウメ^{いぎ}で賑わう初春の風景、郷土の森^{はつがま}的にはまさに初釜^{はつがま}の儀といっても良いくらい、長年続けてきた恒例行事のひとつなのです。野点は自然の風物に接しながら茶を点てるもので、古くは野掛^{のかり}とも言われていました。戦国時代の武将たちが野遊びや狩を楽しむことを野掛と呼び、そのなかで茶会も行われたことから、野外で茶を点てたり茶会を催すことも同様に呼ばれることとなりました。千利休^{せんりきゅう}の弟子が書いた「南方録」という茶道の秘伝書には、清潔さや清浄さを大切にし、景色に心を奪われすぎてもいけないし、興がのりすぎて雑談のようになっていけないとあり、よほどの名人でないといけないもの、「定法なきがゆえに定法あり」と書かれています。されど初釜は、普段なかなか会えない稽古仲間^{けいこそうご}が揃い、各々の晴れ着姿や華やかな雰囲気^{けいふき}を添えることで特定の人に限らず、和気あいあいと楽しめる催しです。あまり堅苦しく考えずに、お茶の心得のある人もない人も、紅白の梅の花に囲まれて、ほのかな甘い香りに酔いしれながら、赤い毛氈^{もっせん}の上で抹茶を一口…ここでホーホケキョなんてひと鳴きくれば、まさにこれこそ、ああこの世の春だ…なんて。

参考文献

動物たちの地球 32 鳥類Ⅱ⑧ 朝日新聞社



© 岩合光昭

岩合光昭写真展

猫

～その瞳に魅せられて～

会期：2004年2月1日（日）～3月14日（日）

ネコの家畜化は中東から起こったと言われています。1200万年前にネコ類は地球上に出現し、紀元前6000～5000年頃すでに家畜化されていたらしいネコの遺骨が出土しているそうです。最初に家畜化されたのはリビアやマネコで、穀物の害獣退治に利用されていたようです。古代エジプトでもネコは穀物貯蔵庫の番人として重宝され、やがてはこのエジプトからフェニキア人によりイタリアに運ばれ、ヨーロッパ全土に広がっていきました。広い地域で家畜化されてからは、さらに選抜や交配を重ね、純血種も100種が固定されています。ネコは気品に富み、かつ家族的で飼育にも順応し、特に人に対する愛情や生活する家・土地に対する愛着が非常に深い動物です。これに対して人間側も、やれネコのTシャツだカレンダーだ置物だと、ネコグッズがやたらと流行るほどに、とても身近で愛らしさの念を抱かずにはいられない存在となっています。

ひと昔前のネコは、半野生的に人間とある程度の距離を保ちながら生活を送っていました。勝手に農家の納屋に子ネコを産んで、ひっそりと子育てをしていた姿などは代表的な光景でしょう。愛玩動物として、あまりにも人と密着した生活スタイルに移行してからは、ネコが墮落してしまったかのようにさえ映ることもありますが、逆に彼らは現在の高級生活を満喫しているのかも……

そんな魅力的な被写体を、世界的に有名な写真家・岩合光昭氏がとらえました。氏は別の撮影で世界中どこに赴こうと、その土地でこの愛らしい動物を追いかけてはいられないといいます。もはやライフワークといっても良いほど、ネコの作品は豊富に所蔵されていると聞きます。普段は地球に溢れる自然の雄大さを全面に出し、躍動感漲る野生を私たちに伝えてくれる氏が、これだけネコに魅せられているということは、何気ない仕草の中に真の野生を見ているのかもしれないですね。

（中村武史）



© 岩合光昭



© 岩合光昭



郷土の森博物館の「お地蔵さん」
寛文10年（1670）造立（西田寛さん撮影）

地蔵の眼差し

「お地蔵さん」は、いつもお坊さんの格好をして優しい眼差しで道端に立ってられます。地蔵は、もとインドの民族宗教バラモン教の大地の神でしたが、仏教に取り入れられて「地蔵菩薩」になりました。天を担当する虚空蔵菩薩に対して地を受け持つ菩薩（修行中の仏）です。地蔵は釈迦の入滅後、弥勒が出現するまでの56億7千万年という長い間、六道に迷う衆生を救済してくれるとされています。地蔵は、僧の姿になり、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、私たちの最も身近なところで、見守り、手を貸してくれるというのです。遠くの浄土で待っている仏さまとは違って、すぐ手が届くところに同じ目線でいてくれる。たとえ地獄に落ちても、そこで救ってくれるのは地蔵だけなのです。

日本では、平安時代中頃の『今昔物語集』に、地蔵が登場する説話が多数載せられています。どれも身に降りかかる災難や苦難を、人間の姿に成り変った地蔵が助けてくれるといったモチーフです。平安時代末になると、浄土への信仰が高まり、極楽と対になる地獄

の恐怖が宣伝され、地獄で救済にあたる地蔵の存在がクローズアップされます。寺を建てたり写経をしたり、膨大な費用の掛かる功德を積むことができない庶民や、いつも戦場で死と隣り合わせの武士たちを中心に、中世以降今日に至るまで、地蔵に対する人気（地蔵信仰）が高まっていきました。

子育て地蔵・水子地蔵・とげぬき地蔵・延命地蔵・田植え地蔵・勝軍地蔵・矢取り地蔵など担当の専門分野による呼称、六地蔵・百体地蔵・千体地蔵など数による呼び名、また地名を冠して〇〇地蔵という愛称など、挙げていけば限がありません。

府中と多摩の地蔵信仰

江戸時代には、路傍の石仏がたくさん造られました。一番多いのは庚申塔で、2番目が地蔵のようです。府中市内では現在26基の地蔵石仏が遺され、いずれも念仏供養のため地元の人たちが建立したものです。是政街道の分かれ道や、本宿共同墓地には6体セットの「六地蔵」があります。また、称名寺（宮西町）の「子育て

地蔵」、西蔵院（是政）の「鼻どり地蔵」など、堂内の木造の地蔵像が特別な信仰を受け、縁日でも賑わったところがありました。「鼻どり地蔵」のことは後でまた取りあげます。

多摩地域に眼を広げると、泉龍寺（狛江市）の「まわり地蔵」や正福寺（東村山市）の「千体地蔵」などがよく知られていました。「まわり地蔵」は、決められた家々を1晩ずつ巡り、毎月の地蔵縁日（24日）の前の晩には寺に戻り、みんなと「お籠もり」をしたそうです。子授け・安産・子育てほかいろいろなことが祈願されました。講中（信仰するグループ）は江戸市中を中心に、多摩地域、埼玉県に及び、戦前までは盛んだったようです。

室町時代の貴重な建築として国宝に指定されている正福寺「千体地蔵堂」の堂内には、小さな地蔵像がびっしりと安置され壮観です。伝えによると、地元で重病人が出ると、本尊を家に借りていき、治るとお礼に小さな地蔵を奉納したのだと言います。どれも身近に対応してくれる地蔵らしい話です。

「鼻どり地蔵」の伝説

府中の「鼻どり地蔵」はこんな話です。

「おかしおかし、あるところに、ひとりのお百姓さんが住んでいました。ある日のこと、いつものように馬を引いて田の代かきを始めました。すると、馬が突然あばれだしました。そして、どんなになだめても叱っても、あばれるばかり。お百姓さんは、ほとほと困ってしまいました。／そのとき、「おじさん、その馬どうしたの。」という声が、聞こえました。驚いて振り返ると、あぜ道に小坊主が立っていました。「ずいぶんあばれるね。ぼくが鼻どりしてやろうか。」小坊主はそういうと、田に入ってきて、馬の手綱をにぎりました。すると、すぐに馬はおとなしくなりました。それから、小坊主は上手に鼻どりをして、またたく間に田の代をかいてしまいました。／お百姓さんは、大喜び。そして、小坊主にお礼を言おうと振り返ると、どこにも見当たりません。／お百姓さんは、「不思議なこともあるものだ。」と思いながら、馬を引いて家へ帰りました。途中、西蔵院というお寺の前を通りかかって、いつものようにお地蔵さんに手を合わせて拝みました。目をあげると、お地蔵さんの着物の裾も足も、泥まみれではありませんか。「さっき、田の代かきをしてくれたのは、このお地蔵さんだったのか。」お百姓さんは、もう一度手を合わせてお地蔵さんにお礼を言いました。」（途中省略あり）（小澤俊夫・文 二俣英五郎・絵『府中むかしばなし』府中市教育委員会 1987）

「鼻どり」というのは、水田の代かきをする馬を操作すること。このたいへんな仕事を小坊主に化けた地蔵

がしてくれたのです。直面した困難に対してすぐに手助けをする地蔵の面目躍如たる活躍です。

「鼻どり地蔵」の由来

さて、僧の姿になった地蔵が「田植え」をしてくれ、地蔵の足に泥がついていたので経過がわかったという似たような筋は、すでに平安時代末の仏教説話集『宝物集』に見えます。「鼻どり」の話も江戸時代に各地に登場するようで、同じ伝説は、北は岩手県、南は鹿児島県に至る広範囲に伝わっています。

府中の「鼻どり地蔵」に関しては古い文献がありませんので、由来など詳しいことはわかりません。近隣では、延命寺（川崎市高津区）の本尊「鼻取地蔵」が江戸時代後期の『新編武蔵風土記稿』に紹介されているほか、西光寺（板橋区大谷口）に「代かき地蔵」という石仏があります。

もう少し詳しい文献として、信州の法華寺（長野県更埴市）に伝わる「鼻取地蔵」の縁起（村山高樹編『鼻取地蔵略縁起』私家版 1997）があります。村上家平が居城の葛尾城（坂城町）の良（北東）にこの地蔵を祀る寺を建立したことになっています。自分が治める農民の信仰を集めるのが目的だったはずですが、また、会津（福島県田島町）の「鼻どり地蔵」の話（『会津田島の民話』田島町教育委員会 1992）では、主人公が仁左衛門、舞台となった田んぼは「地蔵免」と名付けられています。「地蔵免」というのは、地蔵を祀る寺を管理するための費用を賄うため、年貢を免除された水田の意味だと思います。

このように、「鼻どり地蔵」は地域の農民支配や寺の運営と密接に結びついた話と言えます。この伝説が全国的に広まる要因は、こうした事情とともに、農民たちが日々の生業のなかで「お地蔵さん」に求める切なる気持ちがあったからだと思われます。



『府中むかしばなし』より

民具発見

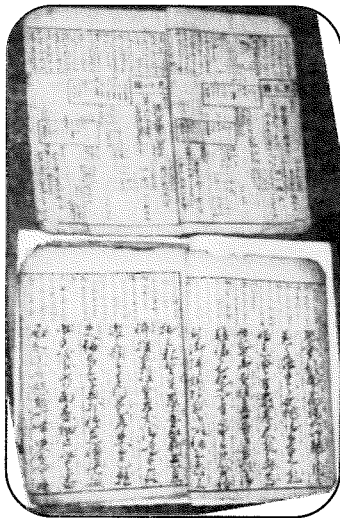
佐藤 智 敬

第三回 紙はゴミ、ゴミは神……

今回は、紙でできたものでさえ、見方によっては民具（民俗資料）なのだと実感した経験を通して、民具を発見する視線について考えてみたいと思います。

そもそも「民具」とは何を指すのでしょうか？『日本民俗大辞典』（2000年

吉川弘文館）には、「衣食住・生業の用具だけのよう
な印象を与えるが、実際は生活全般にわたるもので、人々が生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の一切を含む」とあります。器具以外にも、造形物までも入るのですから、民具の概念は非常に多岐にわたり、紙でつくられたモノもまたそれに含まれると考えられます。



焚き付け用だった古書（未収蔵）

神仏の分身として寺社などが発行したお札や、念仏講や榛名講など、信仰集団の帳面、経典などは信仰に関係する、代表的な紙でできた民具と考えられます。しかし、これらに限らず、紙は全般的に民具である可能性を秘めているのです。

2000年3月、府中市矢崎町のある家で、使われなくなった農機具を見せてもらっているときに、「あげることとはできないんだけど見せたいものがある」と、披露してくださったものがありました。それは、和綴じで長い年月を経たと思われる、数冊の古本でした。それらをよく見てみると、ソロパンの絵や、難しい漢字にふりがながふってあり、江戸時代の手習いや計算を学習するための教材であると思われました。

しかし、これらの古本は、その家の先祖が寺子屋で読み書きソロパンを習った名残ではありませんでした。それは、かつて古本屋が売りにきたもので、読み書きのためでも、骨董として揃えたのでもなく、主としてお茶を作るとき、焚き付け用に買ったものの残りだということです。

かつて、多くの農家ではお茶の栽培が盛んでした。自家用に家の垣根として植えられていた場合も多かったようです。摘みとったお茶の葉は、焙炉という道具を使い、熱を加え手揉みすることで乾燥させ、煎茶にします。焙炉には炭火を使うため、簡単に燃える紙は

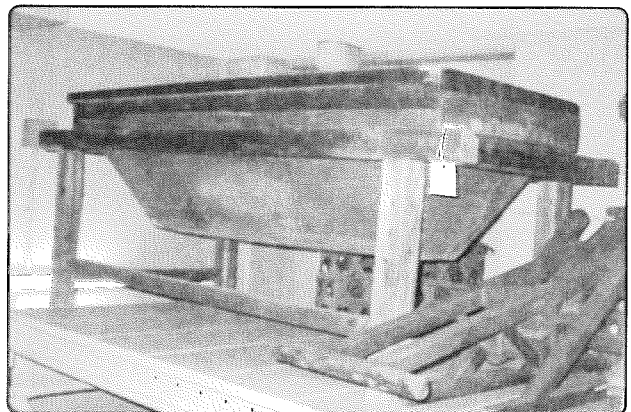
焚き付けとして便利でした。昔の道具の中には、練炭や薪など、今では使われることの少ない燃料も含まれます。それならば、矢崎町の例のように、読み物ではなく、焚き付け用の古紙を「民具」と考えることも、当然できるのではないのでしょうか？

時折、古い家の襖の裏に貼ってあった紙の記述内容から、その家や周辺にまつわる歴史が分かることがあります。その場合、単なる古紙が「歴史資料」となります。しかし、ちり紙や、発行部数も多く、目新しい内容もない、取るに足らないような紙類であっても、その用途、入手の経緯、使用の思い出などをたどることができれば、別の意味を持ちます。仮に偽物と鑑定され、歴史資料としての価値が下がった藤原鎌足からはじまる家系図や織田信長の書状、夏目漱石の初版本（とされてきたもの）などがあったとしても、それらがどのように伝承、価値づけされてきたのかを知ることができれば、立派な民俗資料になりうるのです。

紙の資料には文書資料、骨董的価値、お札のようにそれ自体が神聖さを持つなど、さまざまな見方があります。民具としての紙の場合、たとえ文字が書かれていたとしても、その内容の理解や、真偽判定よりもむしろ、焚き付け用の古本や障子紙、こより（紙でつくったヒモ）などのように「モノとしてあつかわれた紙」である点に注目することこそが重要なのです。

もちろん、モノの意味自体も時代によって変わります。矢崎町で拝見した古本は、茶を揉む作業をしなくなり、江戸時代の古本の価値が高くなった現在、その家の宝のひとつのように、神聖なもののごとくあつかわれていました。かつては燃料用として保管されていた紙も、長い年月がたち、伝承されていく過程で、別の意味を持つようになったのです。

むかし、古本は燃やしたり襖の裏に張る紙として、当初とは別の用途でも利用されていたようです。今でいえば古新聞や古雑誌、広告などの古紙……つまり、限りなくゴミに近いものとして。しかし、紙はその内容、用途、見方によってゴミにも神にもなりえます。だからこそ、民具として発見されることがあるのです。



茶を揉む際使用する焙炉（本館所蔵）

ムダ堀の延長か？

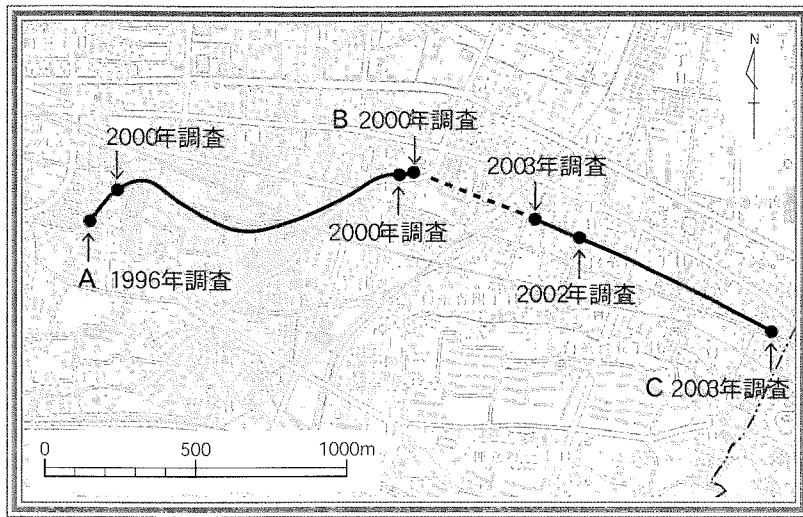
白糸台で大溝を発見

白糸台2丁目・6丁目地区

府中市遺跡調査会

西野

善勝



ムダ堀の推定ルート

ムダ堀が最初に発掘されたのは1996年のことでした。場所は清水が丘2丁目のA地点です。このムダ堀は玉川上水の失敗の痕跡という伝承を持つ溝で、明治初期の地図には、A地点付近から蛇行しながら東へ延びていく様子が描かれています。その後も、明治初期の地図のとおり、3か所で発掘されていて、B地点まで延びていることが事実となっています。

しかし、B地点付近で地図上から姿を消し、そのルートはかきもく不明となっていました。

そうしたなか、今年の夏、白糸台2丁目と6丁目の2か所で、ムダ堀の延長の可能性がある大きな溝を発掘しました。西武多摩川線白糸台駅から東へ約100mと約900mの地点です。さらにこの中間で行われた昨年度の調査でも、よく似た溝が発掘されていました。これにより長さ約800mの溝が、旧甲州街道と品川街道の間にある小道に沿って、東西方向に伸びていることがほぼ事実となりました。

ムダ堀は、最初に発掘されたA地点では上面幅約14m、深さは5m以上という大規模なものでしたが、B地点では上面幅7.5m、深さ1.9mでした。規模がずいぶん違いますが、横断面の形はともに逆台形で、底面は平坦といった共通点があります。一方、新発見の溝は、大きさの判明するC地点（白糸台6丁目）では上面幅の約4m、深さは1.4mでした。さらに規模を縮小していますが、断面形はレンズ状に近い逆台形をしていて、底面はやはり平坦でした。溝の形状や位置、方向性を踏まえれば、新発見の溝がムダ堀に接続する可能性は十分にあると思います。

だとすると、このムダ堀の総延長は、現状で約2.3kmとなります。A・B・C地点の溝の底面の標高は、それぞれ44.4m、44.0m、41.8mで、緩やかな勾配があり、水を流すことも可能です。その姿は、まさに水路のようです。

では、ムダ堀は玉川上水の失敗した痕跡なのでしょうか。まだ問題があります。今回発見の溝跡が、ムダ堀へ接続する確証は得られていません。また、接続するとすれば、この溝はどこまで延びていたのか。そしてまた、ムダ堀が掘られた時代と、玉川上水の伝承が生れた時代はどのような関係にあるのか。さらに、その時代の府中の自然環境や人々のくらしも検証していく必要があります。こうした課題が残されているとはいえ、謎に包まれたムダ堀を考えていくうえで、今回の発見は大きな意味を持つでしょう。



新たに見つかったC地点の溝

玉川上水

玉川上水の全長は51km、羽村で多摩川より水を引き入れ、新宿に至ります。江戸の水不足を補うため、1653～54年に開削されたとされていますが、成立に関しては多くの謎があり、府中や福生で失敗を繰り返したともいわれています。ちなみに、玉川上水は今年開削350年で、国の史跡にも指定されました。

たま RIVER WARS

③ 青い水の警告

中村武史

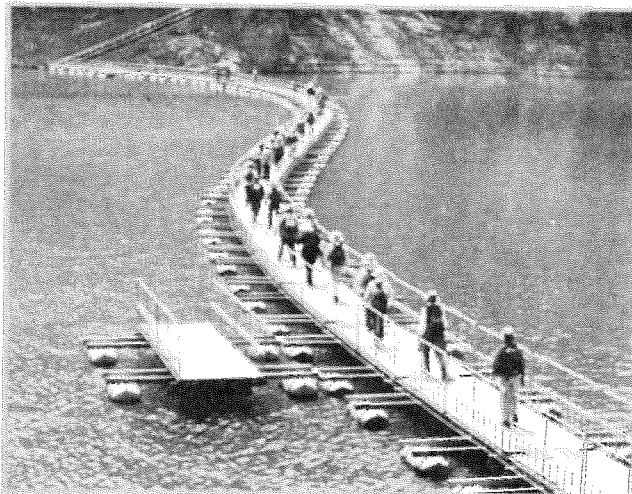
急流の中をイカダは下り始めた。3人は連結された各々の丸木にしがみつこうに腰をかめながら必死に前方を見る。エノキンのこと

が気がかりではあったが、彼がこの多摩川に精通していることで全員勝手な安心感を持っていた。間違いなくこの先で再会できることを想像しない者はなかったのである。むしろ彼一人分このイカダの乗り心地が窮屈にならなかったことに不幸中の幸いを感じる者さえもいた。しかし、ワルーの心中は必ずしも穏やかではなかった。客観的に見ても非常に危険な状況であることに変わりはない。流れが速い上に、点在する巨岩にでも衝突したら命にも関わるのだ。歩き疲れていたはずのセイコでさえ全身に力が漲り、目は爛々と輝いていた。

笠取山の水干から端を発した一滴の清水が険しい谷を下り一ノ瀬川となった。そして柳沢川と合流して丹波川と名を変えた。さらに後山川を吸収して丹波川は奥多摩湖を目指す。奥多摩湖から先がいよいよ多摩川本流となるわけだが……そんなに長く続くのだろうか、この旅は……うっそうとした森林と、険しい岩肌が迫るようにV字谷を造る丹波溪谷の景観を目の当たりにしていると、先の見えない不安でいっぱいになる。反面、古くから多摩川の最も優れた景色と絶賛されてきた丹波溪谷は、夏の深い緑と青い水で織りなす自然の持つ美しさと壮大さを与えてくれてもいた。しがしながらうっそうと景色に見とれてばかりもいられない。丹波溪谷の特徴は冒頭の件にもあるように速い水の流れである。急流が岩を食み、川底をえぐって多くの淵や滝を刻んでいる。エノキンがいればこんなことは当然わかっていただろうが、残りのワルーには知識が薄かった。このままイカダが進めば幾多の障害と向き合わなければならないことに。

一行は、イカダといっしょに置いてあった形を整えてもいない削っただけのオールもどきで何とか舵を取りつつ、常に体中の筋肉を緊張させながらほぼ四つんばいの状態でスピードを上げるイカダの前方に集中していた。迫る岩肌、点在する巨岩にぶつからぬよう、また淵に巻き込まれぬよう大奮闘の中学生たちだった。「あつ、危ない！」タウ工の叫びが溪谷に響き渡る。それはイカダの前方十数メートルに流星のごとく振ってきた石の礫であった。一定の間隔を置いてさらに進むとまたイカダの先に投下される。上を見ても切り立った谷が空を突いているだけ。「ヤツらだよ、サル軍団だ！この谷の上から俺たちを標的に投げてるんだ。

たぶん追われていることに気付いたのださ」タウ工の言葉に迷いはなかった。「そ、そんな～、こうしてるだけで精一杯なのに、もうイヤ～！」セイコの我慢も限界を越えたようだ。「でも、うまい具合にイカダのかなり前の方にしが落ちてこないみたいだし、おサルさんたちかなりノーコンよね」唐い！この状況下で一番冷静だったのはハニー、どうやら細いのは体だけのようだ。「取りあえずイカダを降りよう。下手な鉄砲も数打ちゃそのうちに当るかも」タウ工の判断で持てる力を全開させてようやく急流から脱した3人は、偶然にも降りやすい場所にイカダを着けた。「よし、この林の中を進むぞ。さすがに石攻撃は無理だろうからな。その先でまた川に出りゃあいさ……と、だからイカダは運んでいかなきゃ。」火事場の馬鹿力であった。男手が一人でも、急場の状況が普通なら持ち運びなどできないものも動かしたのだ。大した距離を進んだわけでもないが、例によってセイコが早くも根を上げた。「も、もうダメ～、一歩も歩けないよエ～ン」タウ工もさすがに疲れたようで、「わかったわかった、休憩にするから……ん？おい、あれ見ろ、唐い淵



ドラム缶橋 撮影：上田大志（多摩川センター）

じゃないか」木の間から下方の流れを一目すると、そこには勢い良く一気に渦を巻くように流れる速い水の落ち込みがあった。「……災い転じて……か。あのままイカダで進んでたらあれに巻き込まれてシ・エントってか？危ない危ない、聖なる川の警告に感謝感謝」「石礫の攻撃が逆に私たちを救ったなんて……偶然……よね」ハニーのつぶやきは、タウ工の力強い声に遮られた。「とにかく先へ進もう、いつまたサルの攻撃が始まるかもわから

ないからな」

一同が下った山道は、丹波川と後山川との合流点に出た。再びイカダに乗り水上を進むこと数十分、気がつくとも川幅が広くなりつつ、流れも穏やかにスピードダウンしてきた。「着いたんだ！奥多摩湖の入口だよ。ここで……一息つくしかないだろう、ほら」タウ工が天高く人差し指を突き上げると、オレンジ色に染められた夕暮れの空が目飛び込んできた。あまりにも目の前を一生懸命に見てきたせいで時間の感覚が麻痺していた。もう一日が終わろうとしているのだ。「家族が心配するから連絡しなくちゃ」セイコは半べそである。「でも宿に泊まるお金もないしな……エノキンだって行方不……あつ、あれ！」奥多摩湖の通称ドラム缶橋はプールのコースを分けるフイのようにつながり、その上に板を渡し浮かんでいる。西日に映えて不思議な風情を醸し出すその橋に誰かがこちらを向いて手を振っている。それは真正正銘のエノキンだった。夕陽に照らされた健康的な笑顔は、今にも果ててしまいそうな3人へ懐かしさと同時に癒しを与えていた。

つつく